

社会的包摂を巡る課題について

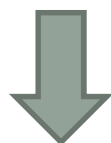
~外国にルーツを持つ子ども若者の支援活動から~

NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ(ME-net) 事務局長
神奈川県央地域若者サポートステーション総括コーディネーター
高橋 清樹

2019年9月9日(月)第104回生涯学習分科会

0. ME-netの特徴

- 1995年にボランティア団体として設立
- 活動先行型＝高校進学ガイダンスの実施のための組織として設立
- 高校教員グループ＋支援者グループ
- ゆるやかなネットワーク＝「多文化共生」を意図して活動



- 2006年に高校進学ガイダンスが神奈川県教育委員会との協働事業に＝**かながわボランティア活動推進基金21**による

1. かながわボランティア活動推進基金21とは

- ・ **神奈川県**の提案型助成金制度

→行政とNPO等の民間団体が協働して行うことが適切な事業を審査して、選考し助成金を付与して事業実施する。

- ・ **5年間継続が可能**

→上限5年を設定し事業実施する。

- ・ **行政の担当部署と協働実施**

→民間と行政がそれぞれ担当する内容を協議して、協働実施

- ・ **助成金の使い勝手がよい**

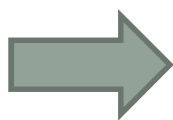
→上限1,000万円。人件費や家賃も可。民間の負担率なし。

かながわボラ基金によるME-netの協働事業

- 2006年~2010年「外国につながる子どもの教育支援事業」
 - 高校教育課との協働によって、次の4事業を実施
 - 高校進学ガイダンスの実施
 - 高校入試ガイドブック(多言語版)の作成
 - 高校へのコーディネーター・サポーターの派遣
 - 行政とNPOとの支援ネットワーク会議の実施

◎協働の意義

- 行政の公共性、情報等の公益性や信頼性の確保
- 民間ができるきめ細かさやアフターフォロー
- 両者で、課題の共有と協力関係・信頼関係の構築



2011年度以降は、神奈川県(高校教育課)の予算で、協定書を交わして協働事業として実施している。

ME-netの活動の広がり

1995年

高校進学ガイダンス+ガイドブック



2005年

教育相談+フリースクール



2006年

~

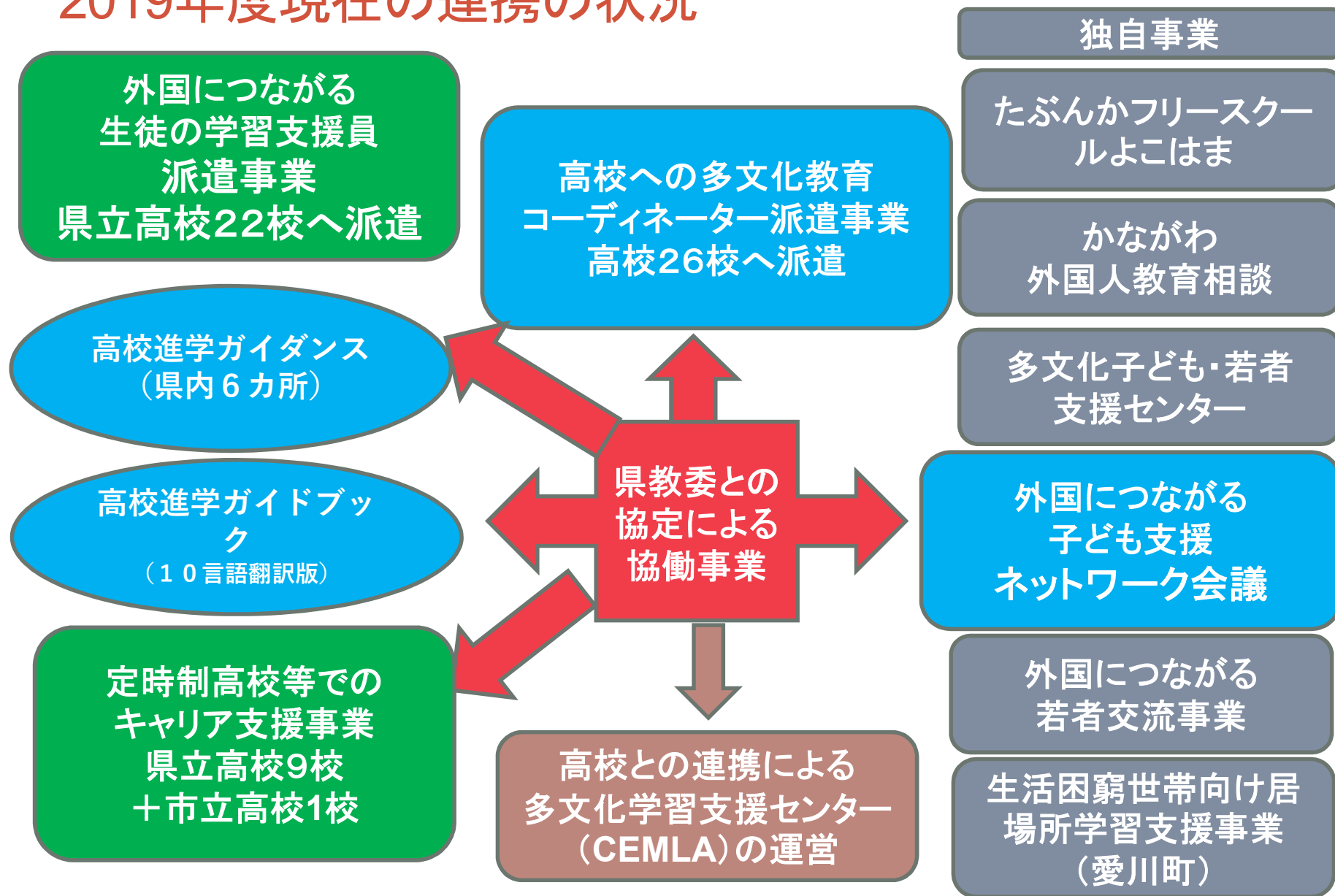
高校進学ガイダンス+ガイドブック
多文化教育コーディネーター派遣
ネットワーク会議



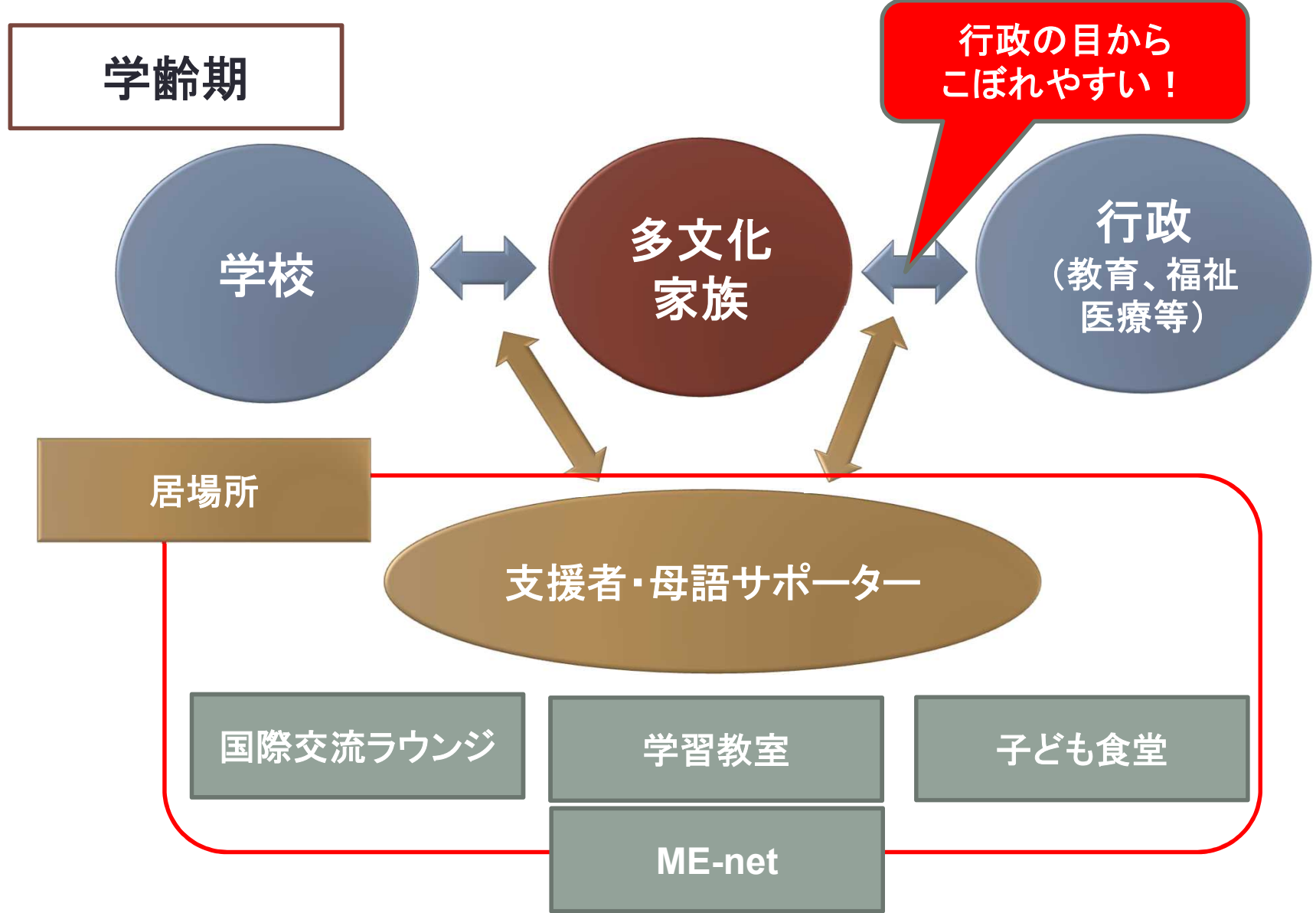
高校への
入口支援

高校の中
での支援

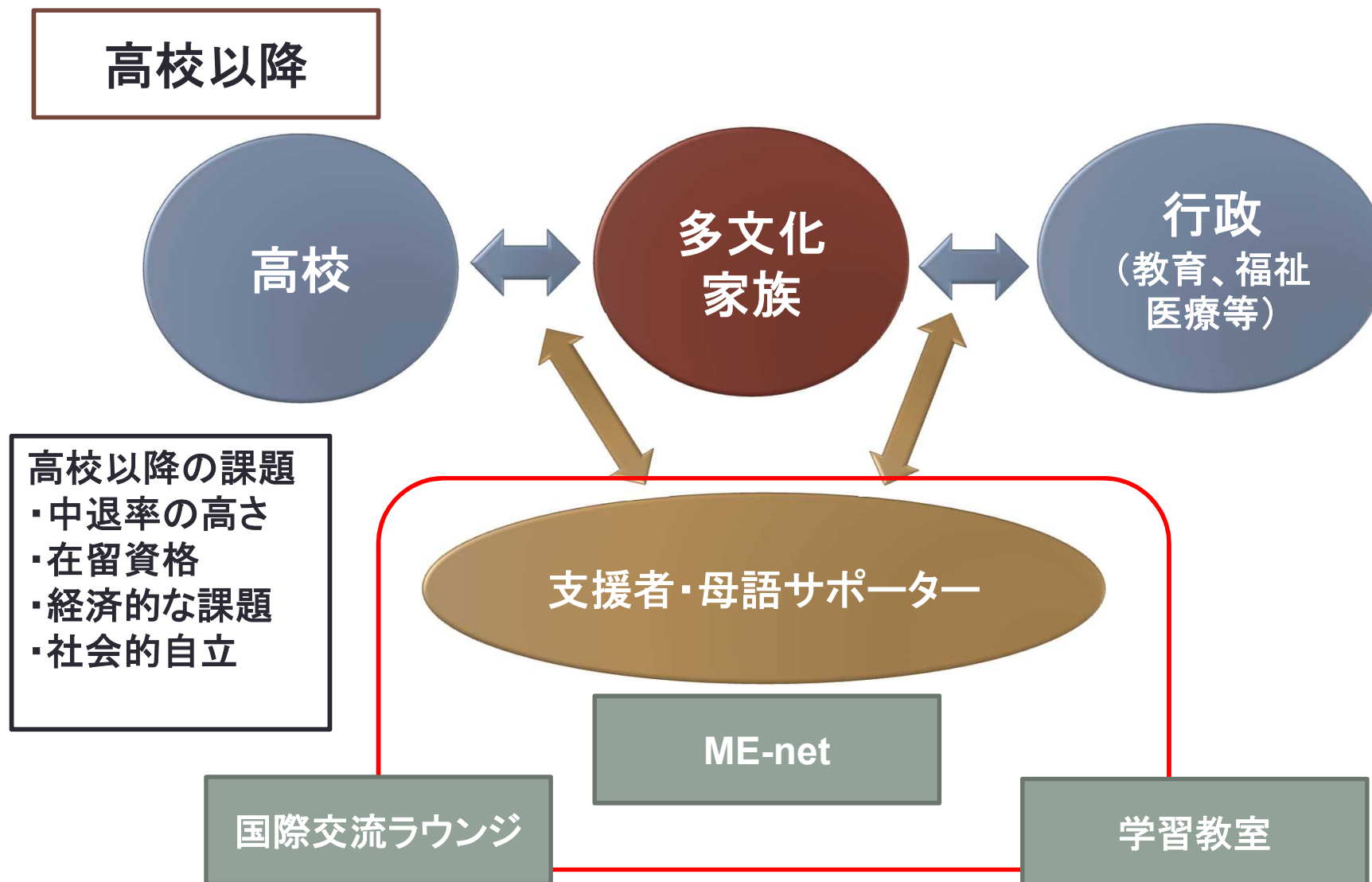
2019年度現在の連携の状況



2. 外国につながる子どもや家庭の支援について



2. 外国につながる子どもや家庭の支援について



平成30年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 高校生等の中退・進路状況に関する調査結果(速報値)

※本結果はあくまで速報値であり、見直し等の結果最終的には異なる数値になる可能性がある。
※ここでいう「高校生等」とは、公立の全日制・定時制高等学校、通信制高等学校、中等教育学校後期課程及び特別支援学校高等部の生徒をいう。
※全高校生等のデータは、各年度の「学校基本調査」及び「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」を基に算出。

1. 中途退学率

※ここでいう「中途退学率」とは、当該年度中に中途退学した生徒数／当該年度に在籍している生徒数

日本語指導が必要な高校生等：**9.6%**(平成30年度、特別支援学校の高等部は除く)
(全高校生等) **: 1.3%**(平成29年度、特別支援学校の高等部は除く))

2. 進路状況

①進学率 ※ここでいう「進学率」とは、当該年度に高等学校等を卒業した後大学や専修学校などの教育機関等に進学等した生徒数／当該年度に高等学校等を卒業した生徒数

日本語指導が必要な高校生等：**42.2%**(平成30年度)
(全高校生等) **: 71.1%**(平成30年度))

②就職者における非正規就職率 ※ここでいう「非正規就職率」とは、当該年度に高等学校等を卒業した後非正規又は一時的に就職した生徒数／当該年度に高等学校等を卒業した後就職した生徒数

日本語指導が必要な高校生等：**40.0%**(平成30年度、全日制・定時制・通信制高校及び中等教育学校後期課程のみ)
(全高校生等) **: 4.3%**(平成30年度、全日制・定時制高校及び中等教育学校後期課程のみ))

③進学も就職もしていない者の率 ※当該年度に高等学校等を卒業した後進学・就職(・帰国)していない生徒数(不詳、死亡は除く)／当該年度に高等学校等を卒業した生徒数

日本語指導が必要な高校生等：**18.2%**(平成30年度)
(全高校生等) **: 6.7%**(平成30年度))

活動事例1) 多文化学習活動センター(CEMLA)

場所: 相模原市の相模女子大学の構内

活動日: 毎週土曜日の10時~12時

運営: 県教育委員会 + 県立高校11校の校長 + 大学3校 + ME-netでの運営協議会による運営。

学び手: 地域の外国につながる子ども・若者(中高生以上)

教え手: 大学生 + 高校生 + 社会人ボランティア等

特徴: 指導グループ化。日本語指導者や教員がボランティアに指導アドバイス

教育相談、教員向け研修等の指導センター的の役割



2018年度は39回実施し、参加した学習者は約954名(内高校生327名)ボランティアは185名が参加!

活動事例2) 多文化教育コーディネーター派遣

どこへ？

- 26の高校(在県枠15校、定時制8校、通信制1校、クリエイティブスクール2校)

予算は？

- 県から1校当たり約25万円(年50回)
- ME-netからも

何をする？

- 高校と協議して決める
- 放課後の補習教室(日本語・母語)、キャリア支援、イベントサポートなど

どんな人？

- 母語話者、地域の支援者、教育に関わっていた人、高校進学ガイダンスでつながった人

県との連携は？

- コーディネーター会議に県担当者参加(年5回程度)
- 県主催の高校との事業報告会(年2回)

高校内でのサポートの主な内容と流れ

入学時

- 合格者説明会、オリエンテーション等でのサポート(通訳派遣、翻訳文書、在籍把握等)
- プレイメントテストの実施

学期中

- 授業や補習等でのサポート(日本語や教科指導やキャリア授業等へのサポーターの派遣やアドバイス)
- 三者面談等でのサポート(通訳派遣)
- 母語による聞き取り調査三者面談等でのサポート(通訳派遣)
- 先輩との交流会の実施
- 学校行事のサポート(文化祭等)
- **定時制5校における「校内相談カフェ」の実施**
- 学校での担当者会議での情報交換
- 「学校外でのイベント」への呼びかけと同行

進級・卒業時

- 三者面談等でのサポート(通訳派遣)
- 進路についてのサポート

「高校生向け進路相談会」

- 2019年7月に神奈川県内2カ所で開催 参加生徒数約120名



7月6日ユニコムさがみはら

7月27日県立川崎高校



なぜ「高校生向け進路相談会」が必要か？

- 外国につながる高校生への進路・キャリア支援
 - ⇒高校での支援だけでは不十分
 - ⇒外国につながる特有の課題がある
 - ・在留資格の問題
 - ・言葉の問題
 - ・進路選択への情報不足
 - ⇒最も効果があるのは「先輩大学生の体験談」
- 大学、専門学校側の意識改革
 - ⇒「留学生」ではない「外国につながる高校生」の存在

参加した主な大学・専門学校

宇都宮大学

横浜市立大学

神奈川大学

東海大学

桜美林大学

東京理科大学

上智大学短期大学部

日本外国語専門学校

YMCA健康福祉専門学校

神奈川県専修学校各種学校協会

活動事例3) 定時制高校でのキャリア支援



相模向陽館高校(昼間定時制)での
「ひまわりカフェ」

- ・毎週金曜日12:30～14:20
- ・ME-net+県央地域若者サポステ+東海大学+エンパワメントかながわ
- ・サポステ職員の常駐
- ・守秘義務と学校へのフィードバックの徹底

カフェの期待される効果

- ・生徒の課題把握
- ・様々な相談対応の場
友だち関係、家庭状況、学校生活、進路相談・・・
- ・進路相談からサポステへつながる
- ・多文化共生の場(外国につながる生徒が100名以上)



「高校内カフェ」

2019年8月19日朝日新聞朝刊から

朝日新聞 2019年8月19日 朝刊 3ページ 東京本社



大阪府立西成高校の居場所カフェでは、食事を提供することも。生徒自身がおにぎりを握る＝大阪市西成区、田中俊英さん提供

緊張解ける場 7年で50校に

しんどさや生きづらさを抱える高校生の緊張を解き、受け止める場所を学校の中にこそ作りたい……。居場所カフェはそんな思いから2012年、大阪府立西成高校（大阪市）で始まり、近年、広がりを見せる。運営するのは、多くがNPO法人など学校外の組織。各地でフォーラムを開くなどして、意義について積極的に広めてきた。

神奈川県立田奈高校（横浜市）で「びっかりカフェ」を運営するNPO法人パノラマによると、現在、全国で約50の高校にある。大阪府立高校では西成高を

1面から続く

#withyou



～きみとともに～

含め14校にあり、府教委は今年度予算に運営団体への委託費計約1100万円を計上した。神奈川県内にも13校。宮城や東京、埼玉、静岡、沖縄にもある。

西成高の「となりカフェ」は、一般社団法人「officeドーナツトーク」が運営し、校舎2階の相談室を利用して月5日ほど開く。日によって異なるが、始業前や昼休み、放課後に飲み物や軽食を用意して生徒を出迎える。ジャズやポサノバなどが流れ、生徒たちは思い思いの時間を過ごす。「リピーター」は多く、スタッフに以前相談したことの進捗、具合を報告したり直接悩みを打ち明ける手紙を渡したりすることもある。

ドーナツトーク代表の田中俊英さん(55)は「学校、家とは違う、生徒にとっての『サイドプレイス』（第三の居場所）として、緊張から解放されたれ、くつろげる場所になれているのではないか」と話す。

今月3日に東京都内で開かれたシンポジウム「居場所カフェが教育を変えていく」では、学校関係者ら約150人が参加。「卒業後に訪れてくる子もあり、必要な支援に早期につなげられている」といった声もあがった。

大人(=社会)から見た現代若者論

今の若者たちは・・・

コミュニケーションが苦手

・いじめや不登校の多さ

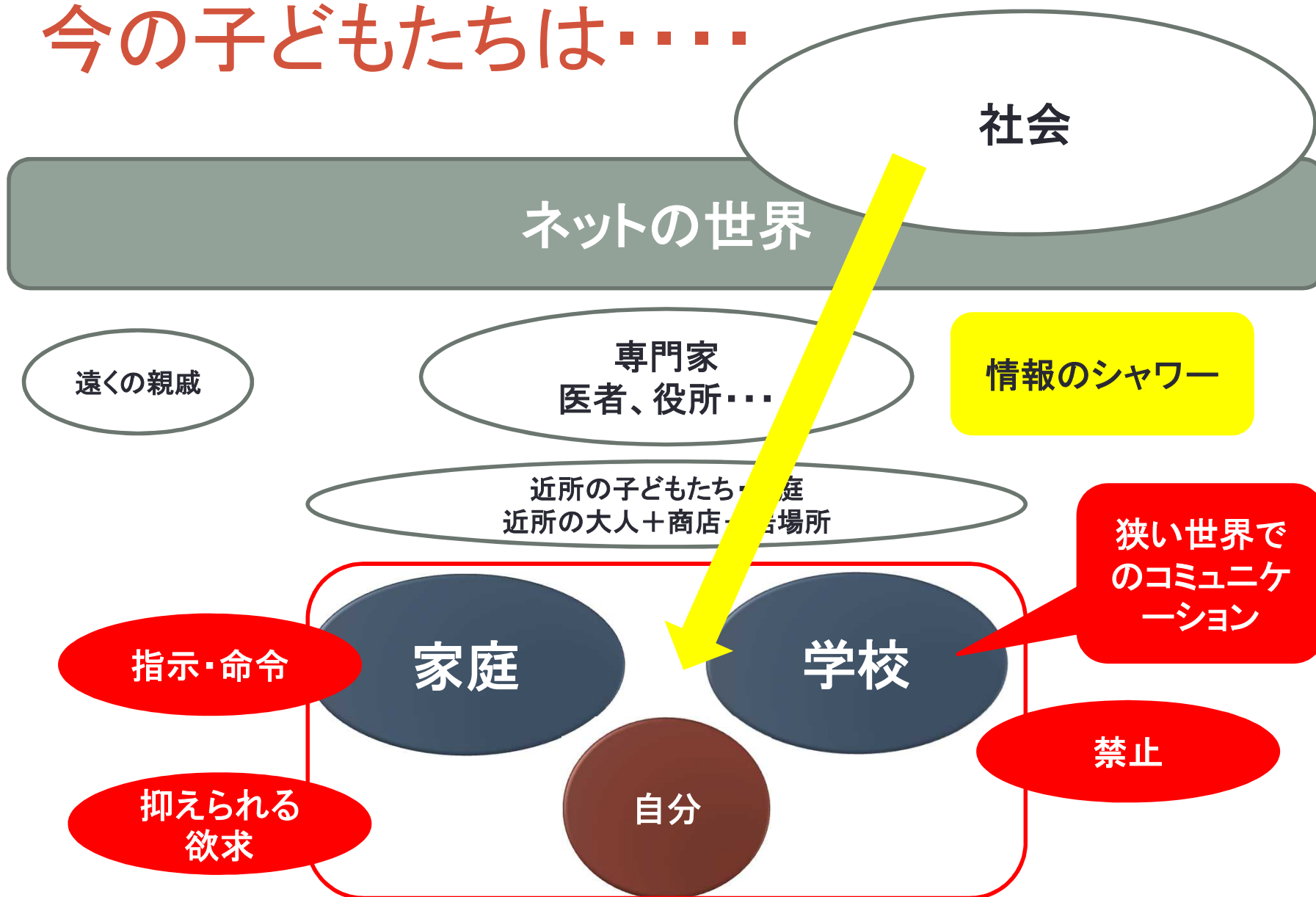
自己肯定感が低い

・自殺者の多さ

社会との関りが少ない

・離職率の高さ
高卒3年以内の離職40%
大卒3年以内の離職30%

今の子どもたちは……



今の子どもたちは・・・

狭い社会で生き、自ら自発的にコミュニケーション手段をとる機会がない！

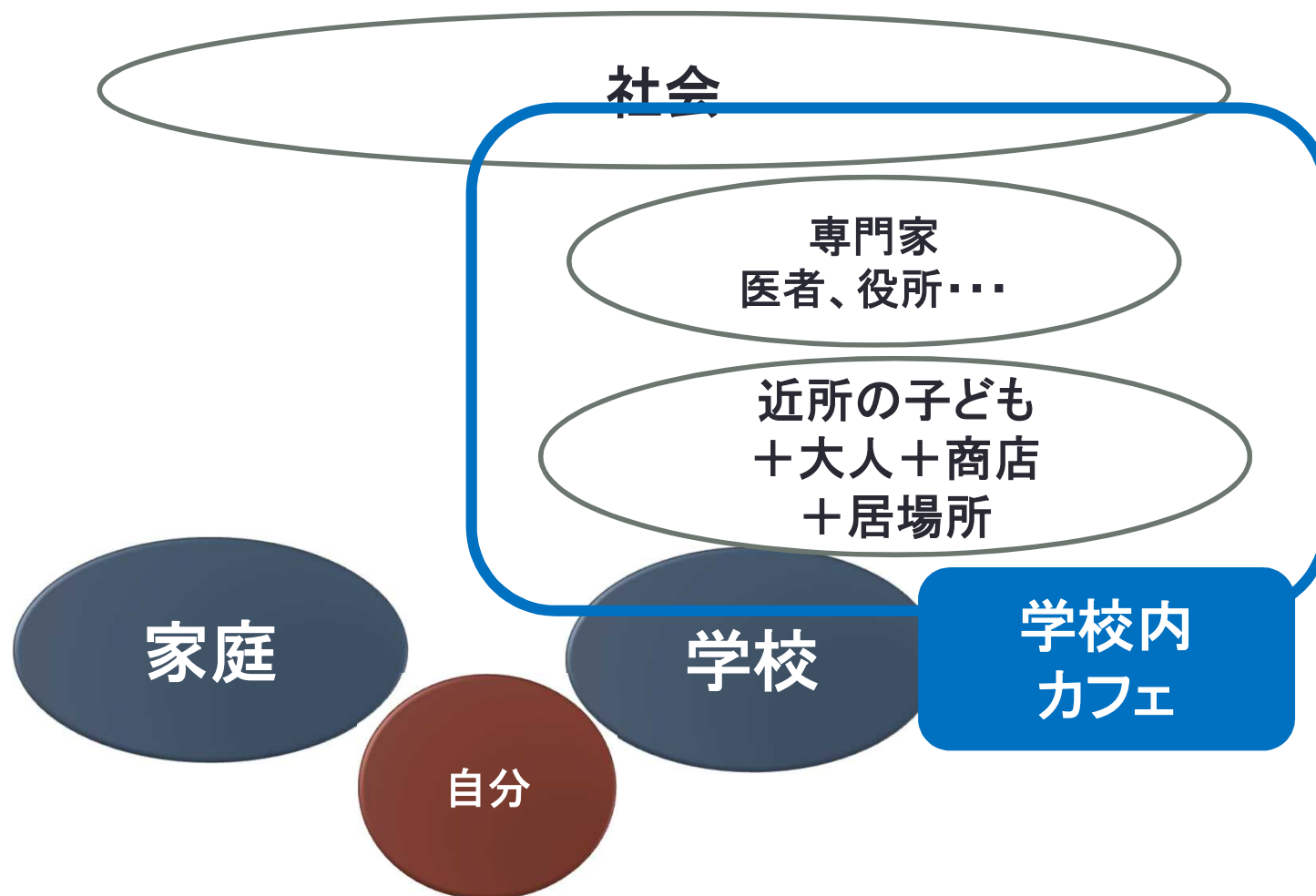


これは社会が作り出したもの！

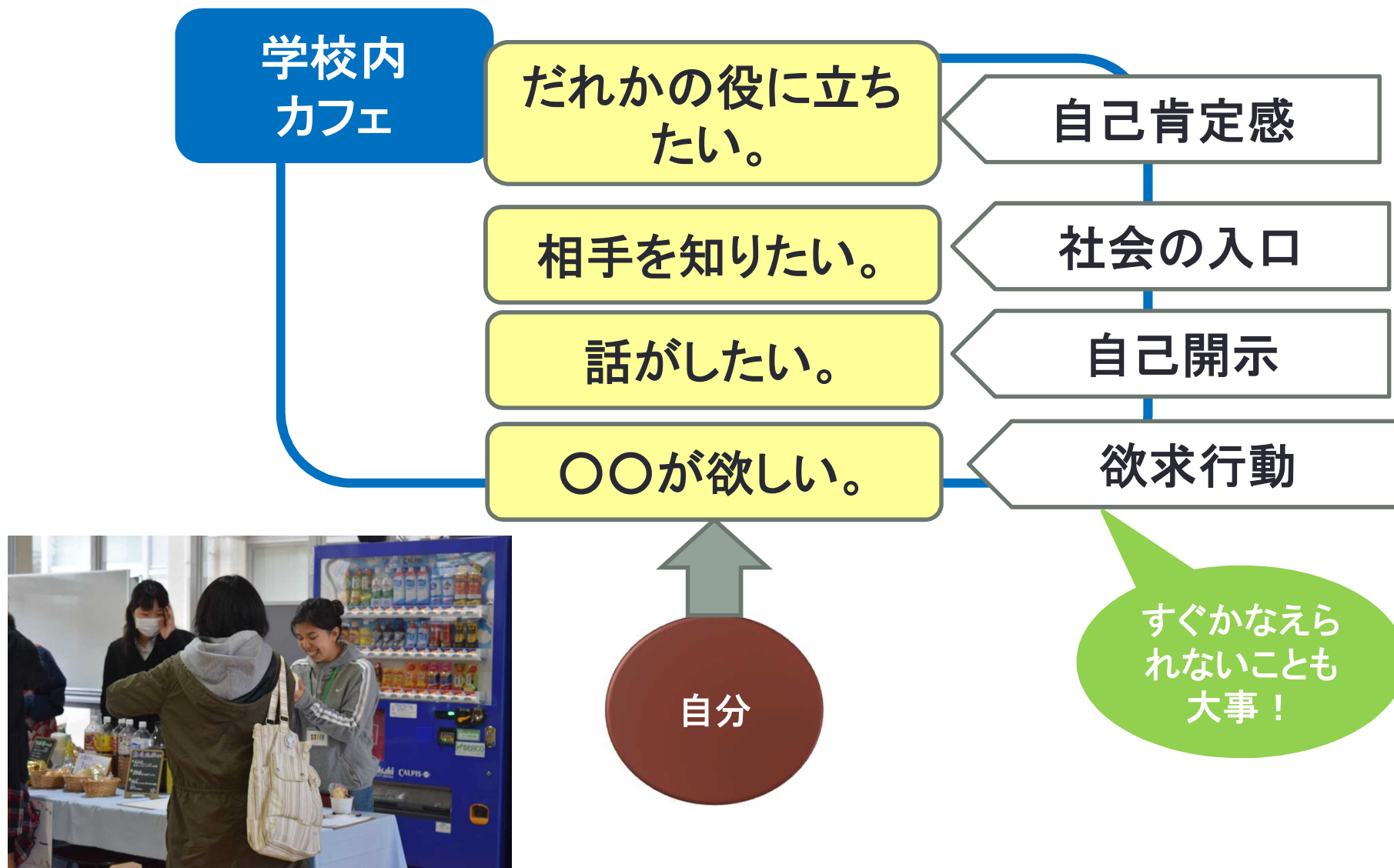


そこで・・・！

①学校に居場所を作ろう！！



② 自発的なコミュニケーションを！



③生徒と社会との接点づくり！

学校内
カフェ

生徒からの関り



スタッフ

- ・NPO等の団体
よこはまユース
ME-net
横浜メンタルサービス
エンパワメントかながわ
CLCA他
- ・就労支援
若者サポートステーション
- ・大学生
横浜市立大学、慶応大
東海大学、法政大他

見学者

- ・福祉関係機関
市や区の福祉CW
児童相談所他
- ・地域の人たち
自治会、商店会
ロータリークラブ他

スタッフは看板(肩書)を掲げない

カフェから見える高校生の素顔

なんで無料なの？

本当は話し相手が
欲しい！



なんで私たちの
ために？

本当は大人を信じ
たい！

過去にもどって
やり直したい！

カフェがあると
がんばれる！

多様性を受け入れる共生社会、多文化共生とは・・・

→生徒一人一人の「困り感」「生きづらさ」「非抑圧感」「自分を受け入れてもらえない孤独感・違和感」など

これらをどのように周囲が受け止め、ともに生きやすい社会にするか・・・

ともに受け止めあい、考える場



共生社会へ向けて